

論文第三 イギリス人貿易商とリスボン大地震

第一節 貿易商トマス・チェイスのリスボン地震書簡

- 一 一七五五年十一月一日午前九時四五分 大聖堂西パドラス・ネグラス街  
貿易商チェイスの生家 地震の衝撃 チェイスの重傷
- 二 十一月一日午後二時 大聖堂西パドラス・ネグラス街  
ドイツ人貿易商邸宅 チェイスの避難 火災の発生
- 三、十一月一日午後十一時過ぎ バイシャ金銀細工通り  
低地帯への移動、火災の拡大、中心部の様相
- 四、十一月二日午前九時 王宮広場  
王宮広場の避難者、群衆の狂躁、リベイラ王宮の炎上
- 五、十一月二日午後三時 王宮河港  
津波の襲来 渡船の待機 人夫との交渉
- 六 十一月三日夕刻 リスボン近郊マドル・デ・デオス、  
水路での避難 ヘイズ邸への寄寓 医家の診療
- 七 一七八八年十一月二十日 ロンドン近郊ケント  
故郷への帰還 震災の総括 チェイスの終焉と墓碑

## 第一節 貿易商トマス・チェイスのリスボン地震書簡

一 一七五五年十一月一日午前九時四五分 大聖堂西パドラス・ネグラス街  
貿易商チェイスの生家 地震の衝撃 チェイスの重傷

建国以来ポルトガルはイギリスときわめて緊密な国際関係にあった。一一四七年初代の国王アルフォンソ一世は、イギリス十字軍の船団に援護されてイスラム勢力を攻囲し、難攻不落のリスボンを制覇した。その後英国エドワード三世は一三五九年に五十年間の通商協定をリスボンおよびポルトとの間で締結し、リスボン防衛に碎身するポルトガル国王フェルナンドもまもなくイギリスとの政治的同盟を確立した。<sup>①</sup>

一七世紀中葉スペインへの従属を断ち切ったブラガンサ王朝は、姻戚関係によって英国王室との交誼を密にし、一六五四年の英葡通商条約によって税制上の特権と貿易商の居住権を認めた。こうして毛織物などの輸入と、ワインを主とする輸出が急速に増大し、とりわけ一七〇三年のメシェン条約によってイギリスの海外貿易がポルトガル経済に深く浸透するに至る。「リスボン在のイギリス系商會が一六五四年には六〇」存在し、十八世紀初頭には九十以上に増加した」<sup>②</sup>

イギリスから輸入される品目は、「優美な飾り布をはじめ、あらゆる種類の織物」まず求められ、「服地、靴下、帽子、鉄製品、皮革、小麦、弾丸などが、ポルトガル本国だけでなく、植民地ブラジルへも運ばれた」こうした交易に携わる貿易商（マーチャント）をはじめ、軍人や聖職者など数千人のイギリス人が、大地震直前の首都圏にいたとされる。古文書によれば、「一五五人の貿易商については氏名が記録され」、「飲食店、商店、旅館一六五人のほか、理髪師、大工、仕立屋、靴屋、教師、さらには辛子屋すらもリスボンに在留した」<sup>③</sup> 彼らの多くは家族とともに暮らし、数世代続けてポルトガルに居住するイギリス人も存

① L. M. E. Shaw, *The Anglo-Portuguese Alliance and the English Merchant in Portugal, 1654-1810*. United Kingdom, 1998. p.6

② 川北稔著『工業化の歴史的前提―帝国とジェントルマン』  
岩波書店、一九八三年。二五三―二五八頁。

③ Shaw, *op. cit.* pp.32, 34, 54.

在した。

貿易商トーマス・チェイスは一七二九年大聖堂近くのパドラス・ネグラス街で生まれた。彼の父も貿易の業務に従事し、家族とともにそこに居住した。一七五五年十一月一日、まさしく二六歳の誕生日にその生家で大地震に襲われた。二ヵ月後に綴られた彼の母親宛書簡は、長大で綿密な震災記録をなし、半世紀を経た一八一三年、伝統ある月刊誌『ジェントルマンズ・マガジン』に全文が掲載された。<sup>①</sup>

二十世紀の中葉T・ケンドリックによって大地震の多面的な講究がなされ、この書簡の史料的価値を認識させた。以後多くの研究者がチェイスの証言に注目し、とくにエトワード・ペイスは故郷で保存される手稿をも点検して、自著の主要な史料のひとつとしている。しかし、これらの労作においても若干の段落の引用や全体の断片的な要約では、源史料の豊かな内容と強い迫力をなお充分に伝えない憾みがある。したがって、本稿ではいくつかの項に分割しながら、書簡全文の試訳を別立てとして提示し、併せてチェイスを囲む状況や大震災の様相について考察を進めたい。なお、『ジェントルマンズ・マガジン』では三ヵ月にわたり、三次に分けて掲載されたが、とくに項の区切りや見出しはない。

チェイスの書簡の冒頭にはウエルギリウスの叙事詩『アエネーイス』の詩句が引用され、トロイアの壊滅に曝された古代の英雄の艱苦が偲ばれる。

「貿易商チェイスのリスボン地震書簡 その一」

リスボンでの大地震においてチェイスに惹起した

出来事の報告 彼自身によって執筆された

一七五五年十二月三一日付母親宛て書簡

われらの惨状を語り、艱難の記録を遺せと申されれば、

<sup>①</sup> Thomas Chase, An Account of what happend to Mr, Thomas Chase at Lisbon, in the Great Earthquake: wriien by himself, in a letter to his Mother, dated the 31st December, 1755. in *Gentleman's Magagize*. 1813, volume 83. february.. march and avril, pp.105-110, 201-204, 314-317.

凄惨な光景だけが脳裡に刻まれ、凍える魂が慄えても、  
やはりお求めには応じましょう。

・・・

いずも陰惨な涙と血に染まり、無惨な遺体が  
累々と横たわるのです。

ウエルギリウス著『アエネーイス』第二巻

一七五五年十一月一日土曜日、ちょうど二六歳に達した当日、生家である四階の居室で九時四五分頃、ひとり私は机に向っていました。そのとき大地の揺れ動くのを感じ、すぐに地震と悟りました。最初は緩やかでしたが、次第に勢いを増し、危険を覚えるほど激烈になったのです。振り返って窓際に目をやると、ガラスが割れ落ちたようです。なおも揺れ続けるに驚き、スペイン領西インドにおけるカロアの悲惨な運命を想起して、ここでも同じ事態が起るのかと考えました。そして、我が家は老朽化していること、重厚な馬車を通るだけで、家が大揺れすることをも思い、まっすぐ屋根裏へ駆け込みました。多くの建物ではそこに個室があり、四方に窓が配かれて、屋根は石柱に支られています。屋根裏は私の部屋からひとつだけ上の階にあり、王都の片側、王宮から城砦までを展望できるのです。隣の住居も激しい衝撃を受けたかどうか、確かめたいと思いました。すぐさま階段を降りた私は、想像を絶する怖ろしい光景を目のあたりにします。家屋が隆起し始め、抛り出されないため、懸命に片腕を窓辺に掛け、壁で身を支えたのです。周りの壁はどの石材が割れて、相互に碎き合い、他の家々の外壁が前後左右に揺れて、世にも凄まじい轟音を発します。ゴダールさんの居室を支える外壁まず崩れ落ち、ついで上方の各階、さらには建物全体が倒壊しました。城砦まで見渡すかぎり、すべての建物が倒れています。王都がすっぽり地中に沈没したように感じ、急いで部屋の正面を見詰めると、ふたつの柱の先端が互いに傾き、ほかはなにも見えません。下に降りようと決意した私は、それができなかつたのです。なぜなら、その場で身体が滑り落ちるのを感じ、どれほど経ったでしょうか、あたかも夢から醒めたように、茫漠たる意識でなにかが堅く口を塞ぐのを知りました。それを左手で取り除けようと悶えます。そして、息苦しいまま、苦闘のすえ自分の頭を丸ごと瓦礫から押し上げました。そのように動きながら我を取り戻し、なにが起ったかを思い起し、地震は終りと考えたのです。王都全体が壊滅し、いま自身は荒墟の頂上にいる、とききに見た光景から推断しました。周囲を見渡すと、五フィートほどの高い壁に囲ま

れています。横わっている場所は長さ十フィート、幅二フィート足らずです。どの壁にも戸口と窓が見当りません。極限の状況にいるのに戦慄した私は、しばらくして狭い空間が住居と住居の間にあることを思い出しました。しかし、住居の上部が見えないので、居住者がすべて死亡したと結論しました。そうでなくても、彼らが折よくそこに来て、救助の手を差し伸べるのはありえないことです。餓死という無惨な末路に慄然として、絶望に沈みながら、そのまま虚脱状態を続けました。とはいえ、なおも瓦礫が落下するため、面前にある狭い壁の小さな迫持せりもちに私は身を寄せました。その底辺に横たわると、小さな抜け穴が目に見えます。苦心して瓦礫から身体を引き上げ、それに近寄って眺めると、思ったよりかなり大きな穴でした。頭と腕をまず潜入させ、ついで体全体を徐々に押し込み、外壁の土台と思われる地点、拱門の下にある暗く小さな地点へ約二フィート跳び降ります。手探りしながら私は、片側に小さな通路を見つけ、竈のような場所を通って、小さな部屋に辿りつきました。そこには塵埃を被ったひとりのポルトガル人が立っていました。私が近づくのを見た瞬間、彼は後ずさりして胸前で十字を切ります。そして、愕然としたとき癖か、大声で叫びました。「ああ、イエス様、マリア様、ヨゼフ様！だれだ、おまえは！」それに返答すると、椅子に座らせてくれました。すぐさま彼は両手を握りしめ、極度の悲痛と不安に震えながら、手と目を天井へ向けました。それまで我を忘れていましたが、彼の仕草で自分の様子を初めて確かめます。重い物体のように硬直して右腕が垂れ、肩は外れ、骨は折れました。靴下も引き破られ、両脚は傷だらけ。右の足首が異様な大きさに腫れ、そこから泉のように血が噴き出すのです。左の横腹を殴打されたように感じ、膝も強烈な打撲を受けたため、ほとんど呼吸できません。顔の左側も腫れて、切り裂けた皮膚からは血が流れます。顔の上部には大きな傷、片目の横には小さな傷、背中と頭部にはいくつか打撲。かくも惨憺たる自分を意識するかしないうちに、前にも増して一層怖ろしい地震が発生しました。浅慮にもそのポルトガル人は戸外へ突進します。震動の凄じさと建物の倒壊、加えて人々の絹を裂く叫びに動揺し、さきに身を寄せた拱門の下へ私はふたたび避難しました。脅威が薄れるのを待って、そこから引き返したものの、だれもいません。あの男が突進した同じ戸口に立ったのは、本人にふたたび出会うか、ほかの人物と出会うのを期待したからです。しかし、予想とは異なって部屋ではなく、数段の狭い階段がありました。さらにそこを曲ると意外にも街路に出ました。これほど近いとは思わなかったのです。粉塵まみれの人々がみな祈禱を捧げ、戸外の照度ははあたかも暗夜のようでした。この

脚でまだ水辺まで行けると、己れを励しながら、下方を振り返ると、狭苦しい街路が倒壊した建物で埋まり、持ち堪えた建物の屋上と同じ高さの盛り上っています。これでは田舎に逃れほかないと、坂道を数歩進んだとき、またしてもおなじく惨憺たる光景が出現しました。右手の街路にだれひとり見当たらないのです！どうすべきか判らず、総身から力が抜けて、三叉路でうつ伏せに倒れました。①

チェイスが呱呱の声を挙げ、誕生日に被災したパドラス・ネグラス街は、丘陵アルファマの中腹、大聖堂の近くにある。西側に隣接する名刹サンタ・アントニオ教会と僅かに離れた教区教会サンタ・マドレーヌとあいまって、その一帯はリスボンの聖域として仰がれる。パドラス・ネグラス街は大聖堂の西端に発し、サンタ・アントニオ教会とその広場に沿って緩やかな傾斜している。

パドラス・ネグラス街は閑静な住宅街であるが、四階建て五階建ての高層建築が連なり、多くの世帯が各々の区画を住居とする集合住宅であった。内部には居室や台所のほか通路、階段、中庭等が造られ、複雑な構造をなしたと思われる。この裏通りには多くのイギリスやオランダが住み、低地帯のサン・ニコラウ教会周辺とともにいわば外国人居住地をなしていた。一階には店舗もないが、多くの貿易商は居室に事務所を置いたとされる。

毛織物の貿易商アンボワーズ・ゴダールもやはりパドラス・ネグラス街に邸宅を構えた。イングリランド西南部から来た彼は名門貴族の四男であるが、兄弟のうち爵位と領地は長男トーマスが相続し、三男のリチャードはプロテスタントの牧師となった。次男以下が軍人や聖職者や貿易商となるのは、イギリス貴族の典型的な身の処し方である。パドラス・ネグラス街には富裕な貿易商が住み、邸宅のなかに事務所を設けたとされる。この年リチャードは結核の療養のためリスボンに滞在し、弟の邸宅に寄寓した。万聖節の朝彼はサン・ジョルジェの城砦へ散策に出かけ、そこで最初の震動に襲われた。②

自宅で衝撃を受けたチェイスはパドラス・ネグラス街に出て、市街の荒廢に愕然とした。右手にはすぐに大聖堂の西端が見えるが、道路は建物の破壊で遮断されている。左手に進んでもまもなく路上で倒れた三叉路は、パドラス・ネグラス街とコレリオ坂との交差点と思われる。

① Chase, *op. cit.*, pp.106-107.

② Paice, *op. cit.*, pp.60, 67.

二 十一月一日午後二時 大聖堂西パドラス・ネグラス街

ドイツ人貿易商邸宅 チェイスの避難 火災の発生

八世紀にこの地を征服したムーア人はアルファマの山頂、現在のサン・ジョルジエ城砦に居城アルカコーヴァを構え、半径約五百メートルの〈ムーア人の市壁〉で丘陵を圍繞した。パドラス・ネグラス街と交叉するコレリオ坂に沿って市壁が続き、サント・アントニア広場との接点に「ポルト・デ・フェロ（鉄門）が築かれていた。」ここは城下への出入を見張る重要な関所であり、凱旋門の意義をも兼ねて、「大理石の円柱と壁龕（へきがん）を付けた塔」が屹立した。ポルト・デ・フェロはリスボンの奪還後、国王フェルディナンドの市壁拡張においても第一の市門とされ、十八世紀にはコレリオ坂のリスト騎士团受胎教会に組み込まれていた。①

三叉路をなすパドラス・ネグラス街とコレリオ坂も、ジョルジエ城下の市街としてつとに十三世紀の史料に記載される。しかし、この一帯がムーア人の築城よりもさらに重要な古蹟であることが、おりしも判明しつつあった。「一七四七年ジョアン・デ・アルメイダは広大な自宅の敷地をはじめ、マグダレーヌ広場、マグダレーヌ街、ペドラス・ネグラスの敷地など四つの空地の地盤を発掘するよう命じた。」こうして「円柱の断片（長さ二メートル四二センチ）、円柱の土台、人体の石造（長さ二メートル四二センチ、横一米メートル十センチ、厚み二二センチ）など、多数の遺物が続々と発見された。この調査は大地震発生の直前まで継続され、パドラス・ネグラス街の敷地には古代ローマの寺院と共同浴場が存したことが確認された。②

「貿易商チェイスのリスボン地震書簡 その二」

もはやいかなる救助も得られぬと観念し、横臥していると、傍らをブランフィル、コダールの両氏が使用人と一緒に通りかかりました。私はまったく口が利けません。やがてハンブルグ市の貿易商、ドイツ人のヨハン・エルンスト・フォルグさんが門口へ出てきて、王都から脱出する手立てが見つから

① A. Vieira da Silva, *A Cerca Moura de Lisboa*, Lisboa, 1939. pp.84-85°

Dejanirah Couto, *Histoire de Lisbonne*, Paris, 2000. pp.23-24.

② Julio de Castilho, *Lisboa Antiga*, tome II, Lisboa, 1881. pp.88-89.

ぬと述べました。そのため一同がもつとも安全と思われる場所、自邸の屋上にあるベランダに登るよう、彼は勧めます。コダールさんたちはこれに従いました。伏したままの私は、まだそこを離れずにいます。しかし、やがて微力を取り戻し、起き上ってフォルグさんの家壁にもたれかかりました。ふたたび彼は門口に現れ、こう呟くのが聞えました。「なんと惨めな姿で！その格好ではまるで別人のようだ。」そして、門口から私の耳元へ来て、大声で言いました「親愛なるチェイス君。なんと凄まじい様子か！上に運んであげよう。そして、君のためできることはなんでもしよう。」「ありがとう、でももう遅すぎます、」と私は答えた。「そんなふうに考えてはいけない、」と彼は言いました。「最悪の事態は過ぎたと思う。私にできる最初の救助を受けてほしい。」フォルグさんは身内のひとりを呼び寄せ、私を階上に運び、椅子に座らせました。そして、飲物を提供させ、ベッドをいち速く用意させて、できるだけ体が楽になるよう、私をそこに横臥させてくれたのです。彼が立ち去ってまもなく、新たな震動のため私は左手で目を塞ぎ、度重なる惨事からは早く解放されるよう祈りました。壁面から石膏がすべて落下してベッドを覆い、激しい粉塵も巻き起ったため、枕元に近い戸口を開き、脱出するのに全力を尽します。この物音を聞いてフォルグさんがすぐにベランダから駆けつけました。そして、屋上で休みたいと願う私に、別の部屋が向側にあり、すぐそちらに寝台を用意すると応じました。納得してそこに移動するや、すでにイギリス人の外科医、シュラストンさんに往診を頼んだ、と彼は言います。しかし、この医師もまた自邸が倒壊し、消息不明になったのです。やや軽度にはなったものの、なおも幾度か震動が感じられ、その間にたえずフォルグさんとゴダールさんが介護に来てくれました。フォルグさんとその伯父は、偶々膏薬を持ち合せ、揺れないときに私の顔と脚に貼ってくれました。伯父は震動の際もベランダには出ずに、屋内に留まってつぎのように確言したのです。「長きにわたり生きてきた。これが摂理の導きだとすれば、どう藻掻いても、息絶えるのだ。」数名の知己が死亡したこともゴダールさんから知らされたとき、運命において彼らは私よりも幸せであると羨みました。また、市内で三つの火災が発生したと聞きましたが、その時点ではまだ警戒するに至りません。ベッドに横わる私は、王都の広範な地域と火の手のひとつが、広々した王都の一点に昇るのを眺めました。またしても私は高層建築の高みにいて、ここも部分的に崩れ落ち、残余の部分も激しく揺れているのです。

二時頃には大地もしばらく鎮まり、粉塵の雲も消えて、太陽が現れたので、

最悪の事態は過ぎたように思われました。地震に関してはそのとおり。しかし、大きな震動のあとにも被害はすくないながら、やはり戦慄と恐怖を抱かせる揺れが続き、どこまで災厄が拡がるか判りません。だが、ベランダにいる人たち、イギリス人、オランダ人、アイルランド人、そしてポルトガル人から成る一団は、そうした小康によって気力を取り戻し、壊滅した都市から脱出する方途を考え始めます。折しもフォルグさんがなおしばらくそこに留まるよう制止しました。皆様のお役に立つならば、と彼はすぐに魚を調理させ、来るべきいかなる困苦にも耐えうるためそれを食べさせます。親身な配慮に感謝し、無気力なまま私もすこし口にしました。悶える私の脳裡を占めるのは、あと数時間ですべての心配からも解放されるとの思いです。なにか希望を囁いて、慰めてくれる者はひとりもいません。どの人たちも生き残りに懸命で、他者を助ける余裕など持たないからです。フォルグさんのベランダがまったく空となり、ブランフィスさんとコダールさんも従業員とともに食事を終え、私に別れを告げて出て行きます。彼らに介護を求めも、支援の要請も頼まず、辛抱強く私は耐えました。しばらくして判ったのですが、フォルグさんだけは高齢の伯父と障害のある老女とともに留っていました。老女は彼に指示された従僕が連れてきた人で、自宅にひとり残され、気づかれなければ、命を失うところと聞きました。身内数人だけを残すのに気づいて私は、フォルグさんが自宅を見棄てる覚悟であると察し、市街へ私を運ぶ人を雇ってくれるよう頼みました。「おそろくできません、」と彼は申します。「ひとりとは別として、自分の従僕はみな離れました。王都が完全に放棄されたのです。あなたが要求されれば、努めてみますが、自分としてはここに留まり、邸宅と運命を共にしようと思いましたが、外に出る行動はより大きな危険に身を委ねるだけだと思います。」この状態でここに残れば、一層厳しい苦難に曝されることをあまり考慮せず、フォルグさんは私にも同じ対処を勧めるのです。①

チェイスやゴダールの住居は十四世紀に創建されたサンタ・マリア・マグダレーヌ教会の教区に属する。この教区の管轄はかなり広く、アルファマ中腹のパドラス・ネグラス街を北限とし、南は王宮広場北東端のインド商館、西は低地帯中央のプラータ（銀座通り）街に至る。

パドラス・ネグラス街に住むアンボワーズ・ゴダールは、万聖節の朝共同経営者とともに顧客のもとへ赴いていた。共同経営者のひとりブランフィルはロンドン・シテイの有力な貿易商の甥、他のひとりジャクソンは南海カンパニー支配人の子息にあたる。地震の発生で急遽パドラス・ネグラス街へ戻った彼らは邸宅の倒壊を知り、路上に倒れたチェイスを発見した。ブランフィル家の家政婦はかつてチェイス家の使用人であり、これら貿易商はかなり親密な間柄と思われる。①

他方兄のリチャード・ゴダールは城砦サン・ジョルジヨの展望台で最初の地震に襲われた。弟の安否を気遣う彼は、坂道を下って自宅近くまで来る。しかし、建物の倒壊と落下する石材で惨憺たる状況にあり、大聖堂の高塔も揺らぐに戦慄し、ふたたび城砦の一隅へ避難した。②

ブランフィルらをしばらく受け入れ、チェイスの介護にも尽したハンブルグの貿易商フォルグも、パドラス・ネグラス街の一角、コレリオ坂の近くに邸宅を構えた。チェイスとフォルグの間に多少面識があったことは、書簡に綴られた両者の会話から判断できる。「ハンブルグの貿易商は」と『都市リスボン細叙』にも誌されている。「さまざまに織られたドイツの布地、また樽の製造に必要なブリキ、銅、ハガネなどの板材を取引する。」こうしたドイツ商人がポルトガルで一定の地歩を保っていた。③

のちに王権の指令で行われた被災調査には、サンタ・マリア・マグダレーヌ教会教区における死亡者の記録も含まれ、荒墟に埋葬された一三七人について氏名と住所も列記されている。死亡者もつと多いのは河岸に近い商店街、パグリア街（パン屋街）の四三名であるが、パドラス・ネグラス街での犠牲者として七名が確認された。すなわち、一、ヴィセンシア（アグステインホ・ジョルジェの娘）、二、パウラ（同じくアグステインホ・ジョルジェの娘）、三、トーマス・ロラン、四、ディアゴ・ロシヤ、五、スザンナ（ディアゴ・ロシヤの妻）、六、氏名不詳（ディアゴ・ロシヤの使用人）、テレーザ・デ・イエゼス。④

① Paice, *op. cit.*, pp.60, 67, 96-97.

② *ibid.*, *op. cit.*, pp.79-80.

③ *Description de la ville de Lisbonn*, Paris, 1730. pp.227-228.

④ Luis de Macedo, *O Terremoto de 1755 na freguesia da Madalena*, pp.11-12.

三、十一月一日午後十一時過ぎ　バイシャ金銀細工通り  
低地帯への移動、火災の拡大、中心部の様相

万聖節の大惨事を倍加した火災については、地震の直後都内の数カ所が発生したとされる。火元としてはカルモ修道院、サン・パウロ教会、ルリカル侯爵邸などが挙げられ、フォルグ邸の高窓からチェイスも遠くに火の手が昇るのを認めた。地震の被害が比較的軽度であった高地帯でも次第に多くの殿閣や建物が類焼する。危険を察してチェイスらがパドラス・ネグラス街から王宮広場へ避難したのち、大聖堂一帯も火焰に包まれた。

大聖堂一帯の被災についてモレイラ・デ・メンドンサはつぎのように誌す。サント・マリア大寺院（旧大聖堂）では時計塔をはじめ古式で雄大な建造物が地震によって倒壊し、教会の炎上によって礼拝堂、事務所、控室もすべて破壊されたものの、壮麗と讃えられる優美な立像、聖母マリア奇蹟像とその衣装がなんらの傷痕もなく護られた。また、パドラス・ネグラス街に隣接する「豪華なサンタ・アントニオ教会は聖アントニオその人が往事暮した旧蹟に建立されるが、かつてリスボン分割のとき市会会議室であった壮麗な建物とともに、また堂内を飾る沢山の銀細工や豪華な装身具とともに、サンタ・マリア大寺院の教区壊滅の際に焼失しその裏手にあって聖歌殿は地震による破壊を受けなかった。人々はそこで驚くべき聖アントニオの奇蹟を目撃した。中心部の礼拝堂ではきわめて炎上が激しく、銀や銅などの祭具まで溶解したのに反し、聖歌殿はそこからやや離れ、地震と火災を免れたため、燈明や多くの装飾に照らされたまま、祭壇の聖アントニオ像は安泰であった。」①なお、コレリオ坂のリスト騎士団受胎教会もポルト・デ・フェロとともに壊滅し、震災後一七七〇年に王宮北のバカルホエイロス街へ移築された。

「貿易商チェイスのリスボン地震書簡　その三」

果てしなく暗鬱な想いに沈んで午後のすべてを過しましたが、その間に見渡せるあらゆる地域へ火災が迅速に拡がっていきます。五時頃には寝ている部屋の窓まで迫ったように思いました。そこに来たフォルグさんがいつにな

① J. J. Moreira de Mendonça, *Historia universal Dos Terremotos, Lisboa, 1757.*  
pp.125-126.

く無言で私を見詰め、後ずさりしながら背後のドアを閉めたのです。さきの言辞からしても、なんの救助も用意されない、と私は疑惑に包まれました。隣室から物音がまったく聞えないように思い、辛うじて立ち上り、しばらく耳を傾けたものの、なんの気配もありません。迫り来る怖ろしい運命を私に知らせず、彼が余儀なく自宅を離れるとの結論、なにも語らずに、彼がここを見捨てるとの結論にすぐさま私は到達したのです。そのため心身の極度の苦悶のなかで決意したのは、己れの運命の機先を制すること、可能であれば戸外の通路へ這い出て、高みから身を投げ、すべての凄絶な惨事に幕を閉じる。ふたつの椅子にすがって、ドアの側まで寄りました。しかし、激しい痛みと憔悴のあまり、私は蹲まり、部屋が燃えたとしても、一步も進めません。最後にやや力を取り戻し、ドアを開けると、外側の部屋にフォルグさんと老女、さらにふたりの人物が車座に座り、口を緘していました。そこまで私が来たのに驚き、理由を問います。破局が迫ったのに、ここでは救われなと思うので、と私は応えました。そして、目に涙を浮べ懇願したのは、フォルグさんが余儀なく自宅を離れる前に、せめて私を不憫に思い、通路に投げ出すか、ほかの仕方でも処分してくれることでした。極度の苦悶のまま置き去りされ、なお数時間生き延びて、ついには戦慄すべき死様に至らないように、と。そんな言い方はしないで、と彼は私を諭します。そして、非常に優しく確言してくれたのは、私を見捨てる意図はまったくないこと、だれも助けに来なければ、自分で背負って連れ出すこと、周囲にはまだ火の手が見られぬこと、また王宮に面して大きな広場があり、そこへの小路がまだ通過できることなどです。時宜に至れば、危害なく私たちは王宮広場へ行けると言います。そこでふたたび私は横臥して身を休め、フォルグさんは然るべき時刻に私を起す用意をしました。しかし、そうした約束もたんなる慰撫ではないか、という疑惑が念頭から消えませんが。そこで私は彼らと一緒にその部屋に留まることを希望し、諒解を得ました。そして、半時間毎に屋上に登り、火災の拡がりを観察したのです。部屋にはドイツ人の紳士が一緒にいましたが、家長の甥と思われまます。十一時頃に従僕ふたり来たあと、すぐにフォルグさんも部屋に入り、いまこそ移動するときと宣言しました。落ち着きはらって、自分の帽子と上衣を取りに行き、私のため頭巾と掛け布団を携えて、外へ出るから寒くなると言います。紳士と従僕に指示したのは、まず私を連れ出し、脚萎えの老女を運ぶため引き返すこと。掛布団を被せ、座椅子のひとつに乘せて彼らが私を運搬したのです。こうした対処がどうしても必要とあとで判りました。いまひとりの男が灯火を持って前を歩きます。瓦礫のない唯一の

進路が狭い坂道で、そこでは哀れな被災者が物乞いするのを耳にしました。フォルグさんの住居を出てまだ遠く行かぬうちに、キリスト騎士団受胎教会が小路の奥にあり、開かれた扉から点火された蠟燭が上部の祭壇に見えます。聖職者の衣服を纏う修道士が一心不乱に勤行を努め、門口に数個の遺体が横わっていました。そこから狭い街路を経てサンタ・マリア・マグダレーヌ教会へ進むと、建物の倒壊はないものの、到る所に巨石が散在。通り過ぎながら街路から見上げると、なおわが家は倒れず、瓦礫越しに上部の窓も見えました。サンタ・マリア・マグダレーヌ教会も破壊を免れたらしく、戸が開かれ、なかに灯明と人影が見えます。火の手が大聖堂への参道にまで拡がったことに私は気づきました。ドス・オウリブス・ダ・プラータ街（銀細工師通り）では全壊の建物はないとはいえ、必死になって窓から包みを投げる幾人かに出会います。ノヴァ・ドス・フェロス街（鉄格子新道）ノヴァ街の入口にさしかかると、路の両側に火が移り、それと平行に伸びる次の路でも同様でした。①

王宮への途上にあつたサンタ・マリア・マグダレーヌ教会も十三世紀創設の由緒ある教会教区であり、ここでの被災の状況は『地誌リスボンの古今』がやや詳しい。このきわめて由緒ある教区教会には豪華な飾りつけがなされ、地震の衝撃によく耐えたが、ついで発生した火災を防ぎえず、すべてが破壊され、焼尽した。尊き聖体だけはジュアン・ピント・ダ・クルズ教区の司祭の尽力によって救出された。装飾品を残したまま、この司祭は聖なる携帯聖体容器を抱え、烈風のなかをサンタ・アポリア教会へ緊急に避難した。そこでサン・ジュリアン教区の人々と合流し、さらに王宮広場へ逃れて先着のきに着いたサン・マルチンホ教区の人々とともに質素な仮設小屋へ身を寄せた。こうした状況のもとにサンタ・マリア・マグダレーヌ教区では苛酷にも一三九人が死亡した。② これら三つの教会の火災はチェイスらがパドラス・ネグラス街を離れたあとであり、王宮への移動を促したフォルグの指示は適切と考えられる。

アルファマ丘陵のパドラス・ネグラス街から王宮広場までは直行して一キロ弱の距離にすぎないが、瓦礫や火焰に遮られ、チェイスらはかなり迂回したと思われる。サンタ・アントニオ教会前のコレリオ坂から出発し、リスト騎士団受胎教

① *Gentleman's Magazine*. op.cit., pp.109-110.

② Joao Baptista de Castro, *Mappa de Portugal antigo, e moderno*, Lisboa, 1768. tomo terceiro, parte V, p.364.

会の勤行と遺体を眺めたあと、サンタ・マリア・マゲダレーヌ教会の門前へ来た。そこから被災の甚大な低地帯バイシャに入り、王都のもっとも繁華な市街を通過したのである。

チェイスが狂躁を目撃したオウリブス・ダ・プラータ街（銀細工師通り）は、バイシャを貫く目抜き道路であり、多くの金銀細工師や宝石商が軒を並べた。ペルリンホ広場を中核として、多くの細道が大道と交叉しているが、なかでもノヴァ・ドス・フェロス街（鉄格子新道）がとくに著名である。王都の発展に意欲的な国王マヌエルによって、一四六六年職人や商人の拠点としてバイシャ南部に幾多の新道が拓き、サン・ジョルジュ城周囲の古い市街と区別して新街界隈と呼ばれた。「最初に新道として造られたのは」とデジャニラ・クト著『リスボン市史』に誌されている。「ノヴァ・ドス・フェロス街と呼ばれる。」ここでは卸売商の居場所が確保され、外国人を含む多くの金融業者が住む。家屋は四階建五階建であるが、「一階には二十あまり店舗が連なる。セヴィリアやピザから輸入した極上の磁器を売る店もある。一五一一年のマラッカ征服以降一五二〇年代には中国製の磁器がとくに求められた。ほかの店ではブルターニュ、ルアン、アイルランドからの亜麻、さらには絹の刺繍、錦織、しゆす繻子、ちりめん縮緬、ダマスカスの布地が樟しょうのう脳入りの行李に納めて用意された。」①

一七五六年に上梓された小冊子においてオラトリオ会の神父マノエル・ポルタルは新街界隈の被災をつぎのように記録する。「金銀細工師通りでは地震に耐えた店舗も、大抵は正面が薄壁であるため、引火するやたちまち建物全体が炎上し、そのため商品として蔵される金銀、ダイヤモンド、種々の宝石も焼失した。その損失は測り知れないが、数百万に達すると噂される。かくして百人以上の貴金属商が破産した。」②

四、十一月二日午前九時 王宮広場  
王宮広場の避難者、群衆の狂躁、リベイラ王宮の炎上

① Dejanirah Couto, *Histoire de Lisbonne*, Paris, 2000. pp.79, 129-130.

② Manoel Portal, *Historia da ruina da cidade de Lisboa*, in F. L. Pereira de Sousa, *O Terremoto do 1 Novembro de 1755 e um Estudo Demografico*. Lisbon, 1932. Volume III, p. 573.

絶対王政の中核をなすリベイラ王宮の偉容は、震災前に描かれた多くの絵図や版画によって如実に表象できる。ヴェネチアのドゥカーレ宮殿とサン・マルコ広場を範とし、十六世紀の初頭マヌエル一世の時代に建設された。海洋王国に相応しく王宮は港湾と直結し、すべての窓からテージョ河を眺望できる。「外装は比較的簡素であるが、」とクトー著『リスボン市史』にも叙述される。「内部には北歐風の豪華な装飾がなされ、ドイツ産の大理石、絵画、琥珀の鏡、彫刻した大燭台が飾られる。王妃の間の上階は、ドイツ広間と名づけられ、燦然たる照明のもとで各国大使の歓待が行われた。」王宮には國務院や財務局など行政機関も置かれ、柱廊で囲まれた庭園は、リスボンでもっとも広大な広場であった。①

さらに一五八〇年ポルトガルを併合したスペイン国王フィリップ二世は、「リベイラ王宮を傑出させるため、広場西側の角にテージョ河沿いの巨大な堂塔トレオを造営させた。」トレアンは国家的儀式の会場としてイタリアの建築家テルジによって設計され、スペイン勢力の撤退後一六六二年にはイギリス国王チャールズ二世とポルトガルの王孫カトリヌ・ブラガンスの婚礼が営まれる。王宮を描いた多くの絵図においてとくに際立つのはこの堂塔である。広を隔てて東側には「巨大な王立税関所も完成した。威圧的なこの建物は吹き抜けの空間を有し、テージョ河に面している。埠頭へ商品を降ろした人々が、歩道橋を渡ってそこへ近づくのである。」②十八世紀に至りこの王宮はジュアン五世によってさらに増築され、豪華な総大司教教会と壮麗な歌劇場が付設された。

「貿易商チエイスのリスボン地震書簡 その四」

広場へ着くと、片側に王宮が聳えて、僅かにそよぐ風を受け、隣接する建物の半分がすこしづつ燃えています。その反対側で私たちはアフォード夫人に出会いました。妹のグレイヴ夫人、そして家族の全員がそこにいて、持ち出した衣類の包に座っている、と彼女は語ります。戸外は寒いので、私を運んだ人たちは、他の重傷者と同じく露店か小屋のようなどころへ置いてくれました。いかなる望みからも見離された自分が、最大の危難と思ひ込み、極度の絶望に沈んで、救助への望みを完全に棄てたのに、建物の倒壊と火災の

① Couto, op. cit., pp.126, 139.

② *ibid.*, pp.139, 1160.

危険への絶えざる不安から一気に解放されたのです。こうして異常な痛苦にもかかわらず、一抹の希望、生存できるかもしれぬという希望を抱き始めました。しかし、この甘美な微光は束の間のもので、新たな脅威が襲いかかり、私の想念を奪い去りました。

審判の日が来た、という観念に民衆のすべてが憑かれたように感じました。善なる業を積もうと願い、十字架や聖者像を携えているのです。男も女も地震の合間に連願を唱和したり、瀕死の者を宗教的な儀式で苦しめています。大地が揺れるたびに、みな膝を屈して、「神よ、赦し給え！」と世にも悲痛な叫びを發します。一切の統治が停止しているこのとき、私自身の様子が彼らの信仰心に火を付けるのではないかと危惧し、また彼らにとって極悪人、異端者に対する狂わしい激怒がどこに向うかが判らないため、いかなる人が身に近寄るのも怖れました。瓦礫が降りかかるのに加えて、さきに沈下した広場を高潮が水浸しにします。そうした光景を二時間ほど眺めると、フォルグさんが家族とともに来て、グレイヴさん一家に合流しました。いまや火焰はほぼ真向に拡がり、負傷者で最初一杯であった小屋から私以外はみな去りました。小屋を打破れ、との大声が突然聞えました。小屋のいくつかに火の手が廻ったのです。遅れた者を外に出そうと、すぐに民衆が私の小屋を叩き始めます。小屋が焼け崩れるまえに、辛苦して私は這い出しました。フォルグさんとほかのひとりが駆けつけ、グレイヴさん一家のところへ運び、衣装包のうえに寝かしてくれました。最後の日が来た、と信じる民衆とグレイヴ夫人も想いは同じらしく、反論しかける私に、まだまだこれから、と語りまします。というのは、向側の銃砲火薬店に火焰が迫り、一気に爆発するのをいまかいまかと彼女が待っているからです。この新たな脅威に私は口を緘し、沈黙してふたりで事態を見守りました。しかし、実態には幸運な結果となり、轟音とともに三つの連続した爆発は生じたものの、とくに災禍はなくて済みました。この間にアイルランドの哀れな乞食女が半狂乱のように聖者なにかの受託を受けたと叫び、炎のなかをノバ街の地下貯蔵所へ突進しました。彼女はそこから一本のブドウ酒を持ち出し、グレイヴさんのもとへ持ってきて、危急の際なのか、なんの心づけも受取らないのです。それは好適な清涼剤で、分与されたグレイヴさんの人間愛に深く感謝しています。

日曜の朝五時頃に風速が変わりました。そして、新たな強風が急速に火の手を大聖堂からわれらの広場まで拡げます。このため私たちにはただちに移動が必要となりました。黒人の従僕たちが私を王立税関所の真向へ運び、雇主の衣類袋をすぐ脇へ移すまで、そこに座らせませす。火焰はきわめて急速に

進み、王立税関所を捉えるや、猛烈な熱風とともに一気に炸裂しました。必死に逃れようとしても到底動けず、燃えついたその場に倒れます。幸いにもフォルグさんがそこに現れ、多少離れた場所へ移してくれました。すぐに黒人たちも来て、私をグレイヴさんのもとへふたたび運び、さきと同じく衣類袋の上に寝かせたのです。いまや私たちは王宮のすぐ近くにおり、宮殿の屋根は崩れ落ちています。焼け残った部分がすくないため火はかなり衰え、多くの残存する障壁が倒壊する恐れのほかは、なんの危険も感じません。九時頃になると、太陽が照り輝き、幾艘かの小舟が河港に来て、沢山の人々を運んでいきました。ひとりの若い男、家政婦の息子が私を見つけて言いました。母親を乗せて運べるよう、小舟を雇うのに彼は駆けまわっている、と。(母親も重傷で、まだ広場にいらるとの由。) 親切にも彼は一緒に乗るのを勧めてくれましたが、ただひとりの友人、フォルグさんから離れるのが忍び難く、易々とは同意できないと思いました。火災の危険が完全になくなることも期待したのです。私たちを取り巻く群衆は、衣類袋を持って小舟を確保しようとみな躍起になっています。莫塵ごきの上に横臥するジュルジュ・パークレイさんは、片脚を石で碎かれたのちに聞きました。しかし、その人も家政婦の息子も二度と見ていません。フォルグさんが水辺から戻ってきて、急ぎそこへ移動しようと、みなに言いました。岸につく小舟はただちに満席となるため、そうしなければ乗れないのです。この提案はすぐさま承諾され、水辺からの涼風をとりわけ爽やかに感じました。しかし、それがながくは続かず、まもなく非常に暑くなりました。遠ざかると思われた火の手が、低層の建築を伝って、水辺近くまで追ってきたのです。そこで私たちは急遽広場へ引き返しました。火焰は河岸に積まれた大量の材木で勢いを増し、河沿いにある王宮の一隅に燃え移りました。こうしてだれしも動揺したことに、王宮は劇的に炎上し、完全に消滅したのです。いまや燃えさかる火の手が四方を囲み、河岸の材木が燃え尽きて、灰燼が降ってきます。私はそれを防ぐため、強烈な熱気にもかかわらず、敷き布団で顔を覆いました。この頃二台の幌馬車を手綱を緩めて走るうちに、一台の馬具に火が付いて背面が燃え上ったため、群衆の前や後に全速力で驟馬を疾駆させました。私からは離れており、安全と思ったのですが、すぐにだれかが叫ぶのを耳にしました。「あなたが燃える！」まさしく私の敷き布団がパチパチと音を立て、地上に引き落されるのを感じました。付いた火は踏み消され、私に返されず。グレイヴ夫人にそのとき私は話しました。「あなたが移動しなければ、みな焼け死ぬことになります。王宮の入口、広場の片隅へ移った方が得策です。そこだけが衣類袋

を置ける場所、風に煽られた火焰を免れる場所なのです。手短にいえば、ここに留まっておかならず火の手に曝されるよりも、壁の倒壊に伴う危険を選んだほうがよいのです。」しかし、精神的に疲労困憊したグレイブ夫人は答えました。「災いを避けるため、もうどこへも行けません。あてもなくすでに幾度も移動したので、僅かでも動くのが厭なのです。」それでもフォルグさんは申しました。「お望みであれば、そこへ移しましょう。」この言葉に従って黒人がそこへ私を運び、ポルトガル人の衣類袋の上に座らせ、帰って行きました。まもなく火焰をも顧みず、ポルトガル人の男女数人が励し合い、王宮の荒墟を抜けて脱出を試みます。果敢にも彼らは瓦礫の上を越え、すぐさま姿を消しました。通過するはずの拱門の一部が崩れるとき、周りの人々から憐みの叫びが起ります。しかし、ひとりも引き返さないのです、彼らが成し遂げたと信じたのです。一時間ほどのち上方でまだ火は燃えているなかで、私の様子がポルトガル女性の同情を惹きました。彼女は私の頭上で十字を切り、陰鬱な口調で祈りを始め、それに合わせて民衆も私たちの周りに円陣を作り、跪拝するのです。ながらく怖れていた事態が生じました。極度の不安を抱いて私はその儀式を見守り、無意識を装うつもりでした。やがて彼女は不意に祈りをやめ、地震のときの常套手段として、「お慈悲を！」と叫ぶ陰惨な高唱が響きました。火災はさらに危険を増し、これら無数の人々が私のまわりに蝟集します。彼らの絶叫が新たな打撃を受ける不安の種となりましたが、怖れた出来事はなにも起りません。むしろこうした情景が物珍しいので、敢えて敷き布団を除けると、眼前ではすべての男女が膝を屈して祈り、壮大な広場に火焰が燃え盛っています。なぜなら、火の手が廻り、懸命に逃げる人々が、衣類袋を持って道路から入り、広場に満ち溢れるからです。私たちが身を寄せる一隅、さきにグレイヴさん一家が避難した王宮の障壁の下を除いて、いまやどこもかしこも炎上しました。しかし、風が一段と激しくなると、火の海が眼前に押し寄せ、いまにも呑み込むかに思われたので、ふたたび精神をすべて喪失した私は、再三避難を重ねながら、かくも怖れていた死様をやはり避けえないのか、と絶望的な心境で考えました。こうして血も凍る気持にしばし沈潜するうちに、突然風が衰え、燃え立つ火焰が拡がるのを止めました。そのお陰でふたたび希望が甦るとともに、空腹に迫られたみなは、食べものはないかと用意の良い人に求めます。ローマ・カトリックを奉じるアイルランド淑女が、私の近くに座り、チェイスという名前ではないかと尋ねました。あなたの父親は多年にわたる知人でした、と彼女は話し、西瓜の大きな一片を呉れます。すぐあとにフォルグさんもパンを持

つてきて、グレイヴさん一家のもとまで私を背負い、そこに据えました。まもなく彼は伯父と老女を連れて河港へ行き、なかなか帰らないので、彼らが立ち去ったと私は思い始めました。(ベントハウスが焼け崩れたので、いまは河岸へ行く道が開けたのです。)①

書簡の冒頭に掲げられたウェルギリウスの長編『アエネーイス』は、トロイアの陥落と壊滅から脱出した英雄が、リビア、カルタゴ、クレータ、シチリアと遍歴の旅を続けたのち、同志とともにローマの建国に至る叙事詩である。彼らの艱難と悲願を察したカルタゴの女王は、一行を宮廷に招いて歓待する。その席上女王の懇請に応じて彼が沈痛な面持で語るのは、十年に及ぶトロイア包囲、巨大な木馬の奸計、ギリシャ軍の突撃と破壊、王城の炎上と国王の横死、住民の虐殺と惨状、さらには行方知れずの妻クレウーサの亡霊である。ペドラス・ネグラス街の高窓から王都の壊滅を見詰め、従僕に担がれて市街の惨情に慄然とし、壮麗な王宮の炎上を広場で眼前にしたとき、チェイスの臉にはウェルギリウスの叙事詩とそれらが重なったであろう。

リベイラ王宮の焼失は、リスボン大地震に係わる最大の物的被害と考えられる。さきに引用したオラトリオ会の神父マノエル・ポルタルは、リベイラ王宮の被災についても詳細の語る。「王宮は地震にはよく耐えたが、火災によって壊滅した。猛火によってインド商館の穹窿が崩れ落ち、そこに蔵される莫大なダイヤモンドと金銀、一万一千件から一万二千件が灰燼に帰した。同じく王宮のあらゆる画廊、広間、居室、控室、官房が豪華な設備、金製銀製の食器、豪奢で得難い宝玉、貴重な家具、さらには七万冊を所蔵し、ヨーロッパ随一と評される図書館とともに焼失した。こうした王宮内部の被害はその巨大さを測り知れない。」王宮に隣接する豪華な歌劇場と総大司教教会も壊滅し、王宮広場に面する公共の建造物も破壊された。「主要な省庁も」とポルタルはさらに続ける。「すべて火災に襲われた。宮内府、財務省、軍事省、三身分協議会、インド商館、王立税関所、軍事財務局、その他多くの省庁が炎上したのである。これら壊滅した省庁における書類の焼失と公私にわたる損害も、いかに膨大であるかは測り知れない。」②

五、十一月二日午後三時 王宮河港

① *Gentleman's Magazine*. op.cit., pp.201-202 .

② *Portal*, op.cit., Volume III, pp. 601-602

大西洋に流れ込む直前、テージョ河が形成する入江、マール・グ・バルハは、広さと美観によって天成の良港とされてきた。一八九三年に刊行された大著『リスボンのリベイラ地区―マードレ・デ・デアスからサントス・オ・ヴェルホに至るテージョ河畔の歴史的記述』においてジュリオ・デ・カステルホは王都一帯の沿岸部をつぎのように称讃する。「数世紀にわたりリスボン港はヨーロッパでもっとも安全な港のひとつと評価されてきた。防禦の堅さと規模の大きさという条件から、また文明化され、工業化されたヨーロッパとアメリカ・アフリカへの中継という条件からも、ポルトガル人だけでなく、外国人も競って愛顧するのである。」こうした港湾の活気についてカステルホはさらに言う。「遠方へ出発したり、遠方から到着するさまざまな船舶の往来を眺めてみよう。あるときは東洋の品々を積んだ商船が、ほかのときには勝利の証しを掲げた軍艦が港に入る。河岸の造船所では一方に古い船が集められ、他方では船上に荷が積まれる。そして水鳥が巣に帰るように、近隣の街々では大勢の船乗りが憩いを求める。」<sup>①</sup>

なかでも入江南岸のリビエラ王宮河港は、その隆盛を多くの絵図に描かれてきた。一七五二年の版画『ポルトガルの王都、リスボン全景』によれば、インド、ブラジル、北欧、北米などからの大型帆船が沖合に多数停泊し、埠頭の近くには近距離用の小舟や舢が航行している。遠隔地からは英国商船がもつとも多く、たとえば一七一五年にイギリス発ポルトガル着が総数二二六艘、総積載量一万六七九〇トンを数えた。<sup>②</sup>

チエイスの目の前で炎上した王立税関所は、王宮広場の東側、河港にもっとも近い位置にあった。「認可された業者は」と『リスボン市史』に誌される。「埠頭へ商品を卸し、木造の跨線橋を渡って広大な王立税関所へ入る。絹、象牙、漆、磁器などの梱包が、王家の紋章を掲げる正門へ運ばれ、大理石の穹窿のもと、一階の十四の室間に収納される。」<sup>①</sup>

① Julio de Castilho, *A Ribeira de Lisboa, Descripcao Historica da margem do Tejo desde Madre-de-Deus ate Santos-o-Velho*, Lisboa, 1893. p.4.

② H. E. S. Fisher, *The Portugal Trade, a Study of Anglo-Portuguese Commerce 1700-1770*, London, 1971. pp.87-89, 150, plate 1 between p.78 and p.79.

① Couto, *op. cit.*, p.139.

火災によって王立税関所は壊滅し、至近に位置する新造のペドラ埠頭でも想像を絶する大惨事が生じた。地震発生直後無数の被災者が空地を求めて、テージヨ沿岸に避難した。王立税関所向側のデプレラ洲には大理石造りの巨大なペドラ埠頭が築造されたばかりで、数百人の住民がそこに身を寄せる。この埠頭が河底の地割れによって不意に沈没し、住人全員が水死したのである。②

王宮河港の東側はこのように凄惨な様相を呈し、チェイスらは西側の河畔へ身を寄せたと思われる。王宮西端の堂塔トレオとコルト・レアル宮殿の間には、一五世紀マヌエル一世によってにリベイラ・ダス・ナウスの埠頭が築かれていた。リスボン港を描いた絵図によれば、多くの中型船や舢舨はこの埠頭から発着した。早急な帰国を願うイギリス人もひとまず近郊に避難するため、ここで用船を求めたのであろう。

「貿易商チェイスのリスボン地震書簡 その五」

危険を察して私を河港に移動させるよう指示したのは、ウォベスさんと思われませんが、こちらの懸念をなかば肯定し、心外にもあなたをフォルグさんがついに置き去りにしたと申しました。自分とは言えば、然るべき根拠によつてつぎのように考えました。早々とフォルグさんが私を見棄てないのがむしろ意外であり、度重ねて命を救い、切迫した危険が遠のくまで尽くしてくれたことが無上の幸せである、と。だから苦情を呈するどころか、命を救われたことを深く感謝し、ひたすらフォルグさんの至上の幸福を祈ったのです。とはいえ、彼こそ私を氣遣うほど唯一の人物であつて、いまはきわめて危険な状況です。援助を期待できるなにもいらない以上、可能なかぎりみずから努力しようと決意しました。そこで直接グレイヴさんに向かって、家族のため確保に努めている小舟に、私も乗れないかと頼みました。「家族だけで一杯なのだ、」と彼は答えました。「親切になる余裕などないよ。」助けるような素振りはありません。河岸の小舟がかなり大きいので、この返答に驚いて、私は求めました。「黒人の従僕もあなたの家族に含まれるのでしょうか。そうでなければ、小舟を借りる交渉のため、彼らのひとりをお雇わしてください。」ウォベスさんが黒人のひとりをお雇するらしく、直接私に答えます。「どこへ行くにせよ、お望みのお通り従僕がしてくれるで

しよう。」「望まれるなら」とグレイヴさんも言います。「そうしてもよいが、百モーダス差し出しても、小舟を確保できないでしょう。」「しかし、これ以上悪化した状況には耐えられぬと思い、両氏の意向をそのまま受け入れました。そして、黒人のひとりに河港へただちに赴いて待機し、私のため座席を確保するよう頼みました。河を遡って私をマドル・デ・デオス修道院、(神の家)まで移動させ、さらにそこからヘイクさんの邸宅まで背負って運べば、三六シリングの貨幣を与えると約束したのです。乗船の費用を安く交渉すれば、沢山の残額が彼のものになるとも言いました。記憶が正しければ、そこから広場の奥深く、河港まで私たちを移動させたのち、グレイヴさんは近くの大きな馬車に家族を乗せて去りました。あとには下婢だけが残され、彼女が携える衣袋の上に私は横臥したのです。この頃顔に火傷をした少年が、彼女のもとへ来て、一途に水を哀願しました。残りがほとんどないので断られます。すると彼は地に横たわって、苦悶の極みのように叫び出し、これを怖れて彼女はすべての水を与えました。ほどなく私の目に映じたのは、さきに西瓜を呉れた淑女ふたりが、水辺の方へひとりの男と行くところで、小舟に私を乗せる余地がないか、彼女らに尋ねるよう下婢に頼みます。厭だと彼女が言うので、姿を見かけた船頭を呼ぶよう、重ねて頼みました。ついに彼のひとりが近寄ったので、半モーダを差し出します。それを受け取らず、船頭は申しました。「俺たちはもっぱら王宮の召使を乗せるために派遣された。だが、戻って仲間と相談してみよう。」三時頃と思われませんが、地底から凄まじい轟音が聞え始め、あたかも大地を割るように、荒墟と化した王宮を貫ぬきました。さらに河流が驀進し、大きな岩石を押し流したのです。しかし、事由が判らぬまま、それが私の出立まで続きました。喫茶店の経営者フーストンさんは、見知らぬ人物でしたが、私の惨めな状態を見てこのとき近寄り、なにか手助けしたいと申しました。夜が更ける前に広場から出立できるかと私は尋ねます。できないとフーストンさんは答えました。なぜなら、搬出できたいくつかのオランダ製の物品を運びたいが、明日以降でなければ、運搬の手段をとっても確保できないからです。物品をここに移し、側に座るよう私は勧め、快く彼が従ったので、気持が大層楽になりました。というのは、さらなる援助をグレイヴさん一家から受けるることにはほぼ絶望し、親しい人の支えを持たぬ私がどうなるか、夜が迫るのに判らないからです。ながく時が過ぎ、望みを断ち切った頃に、ふたりの船頭が再度来て、前払いであれば、私を運ぶと申し出ました。高すぎるとフーストンさんは言いましたが、時刻を考えて私は譲ります。黒人も帰ってきて、十八シリングで承諾し、すぐさ

ま出立となりました。最高の喜びをもって黒人に背負ってくれるよう頼みました。フーストンさんには私から同行は勧めず、彼もそれを求めません。彼にもグレイヴ一家にも別れを告げましたが、一家はガラス馬車から戻ったばかりで、なぜかたがいに言い争い、涙を流していました。フォルグさんの同業者ブロックマンさんが一家とともにいて、彼らを小舟で移送するため、河港へ来ました。しかし、あとで知ったのですが、家族全員と衣類袋を同時に乗せるほど小舟が広くないため、ブロックマンさんの勧めを断り、家族が別々になるよりもさらに一夜広場に留まるのを選んだのです。したがって、この一家は火災の危険にまたしても曝され、哀れにもフーストンさんは混乱のなかで衣類袋を死守したものの、かのオランダ製物品を失いました。けれども翌日には彼ら全員が無事に広場から離れたようです。①

一八一三年にチエイスの書簡全文を掲載した月刊誌『ジェントルマンズ・マガジン』は、リスボン大地震の第一報を一七五五年十一月の巻末に取り込んだあと、翌十二月号にはポルトガル駐在イギリス全権大使カストルズの書簡をはじめ、現地イギリス人の証言を数多く載せている。なかでも同誌主幹に宛てたある無署名書簡は、地震と津波によるリスボン港の惨状についてつぎのように伝える。「驚愕したのは大型船数艘が浮遊し、河下で流されるのを見たことです。大河の全面が小舟、商船、木材、マスト、家具、酒樽に覆われています。」無数の船舶があるいは破壊され、あるいは陸に押し上げられ、通常の運航はすべて不可能となったが、救助や利得のため午後には船が動き始めたようである。「午後の二時頃小舟が航行を始め、多くの者がそれに乗りました。イギリスの船舶は岸边に集った自国の男女を乗せるのですが、大勢のポルトガル人が彼らを囲んで遮ります。一緒に行けば、俺たちも救われる、と言うのです。打ち倒された者を元気づけるなにかを、彼らは見出したのでしょうか。哀れな住民のこうした恐怖、悲哀、叫びと嘆きは言葉に表わせません。だれもが赦免を祈り、たがいに抱擁して、友よ、兄よ、妹よ、赦してくれと叫ぶのです。」②

黒人に背負れたチエイスが客席を確保できたのは、十一月二日の夕刻と思われる。ポルトガルの港湾でも特権を有するイギリス船舶が、震災後いつ出勤を始め

① *Gentleman's Magazine*. op.cit., pp.202-204 .

② Anonym, Letter dated November 19 from Lisbon, in *Gentleman's Magazine*, 1755 november . p.561.

たかは詳らかでない。しかし、彼が乗り込んだ大型船があるいはそのひとつかもしれない。

六 十一月三日夕刻 リスボン近郊マドル・デ・デオス、

水路での避難 ヘイズ邸への寄寓 医家の診療

ポルトガルの王都を訪れた多くの旅行者は、街々で夥しい数の黒人が働くことに驚いた。「異国的な雰囲気」と『リスボン史』の著者クトーも述べる。「リスボンでなによりも感じさせるのは、異境から来た人々の相貌である。象牙海岸、ギニア、ザイール、モザンビークを故郷とする奴隷たちによって、市街は異様な様相を帯びる。」すでに十六世紀中葉彼らが人口の一割を占め、一万人に達した。

「貴族の家々はどこでも二十人から三十人の奴隷を所有していた。ブルジョアや親方は三人か四人である。リビエラ地区で魚を売る女も、愛犬と同じように奴隷を買うことができた。」「苛酷な労働に携わるアフリカ人は、船舶の積荷を降し、教会や修道院の工事に使われ、路上の汚物を取り除き、河岸で魚類の籠を洗い、遺体を埋葬した。」貴族やブルジョアは従僕として連れ歩き、宮廷では楽師や踊子の役割も勤める。「日常生活では不可欠な存在であって、台所に必要な水、木材、炭などを運ぶ。控え目な一家でもひとりには給仕をさせた。」①

リスボン大地震においてアフリカ系住民は極度に悲惨な状態に陥ったと思われるが、彼らの状況について書かれた記録はほとんど見出されない。チェイスの書簡は黒人の被災そのものを書いたものではないが、災害時における避難や輸送に彼らがどのような役割を果たしたかを明確に記録している。こうした観点からこの史料はとくに貴重と考えられる。王宮河港を中心とする港湾部、リベイラ地区は入江マール・ダ・パルハの北岸に拡がり、大西洋にもっとも近いベルンからリスボンの北東約ニキロのサブレガス河港に及ぶ。救護を求めたヘイズの別荘について、チェイスは位置を明確に誌していないが、マドル・デ・デオス尼僧院の近くと船頭に指示した。

「貿易商チェイスのリスボン地震書簡 その四」

さて、話を自身の状況に戻しましょう。黒人の少年がもうひとり手助けを

申し出て、それを受け入れます。こうしてふたりに担がれて大型の船に乗り組みました。ほとんど満席で、真中に板が敷かれています。後から来た聖職者が負傷した私の脚を迂闊にも踏み、耐え切れぬばかりの痛さです。しかし、水上の涼しさがふたたび私を落ち着かせました。(夕方はよく晴れ、静穏で快適でした。) 船は火災から遠ざかり、河をすこし遡って魚市場のある河港で停まります。その大きな広場から河畔に沿って田園へ向う街道があるのです。乗客はみなそこで岸へ降り、仰天する私を同じように陸へ移そうとします。保ちえた精神のすべてをふり絞り、絶望的な心地で申しました。「私の様子を見てほしい。陸に降ろしてどうなるのか！君たちは約束を守らず、ここに私を座らせ、またも火の手にさらすのか。むしろさきに居た広場、火災がほぼ終息した広場へ帰してほしい。」「そんな約束は知らない、」と黒人のひとりが答えます。「私たちは向岸の町にいますので、仲間が約束したのなら、間違っている。また、潮の流れからしてもそれは難しい。」「そこで私は行けるところまで運ぶよう彼らに指示しました。こうしてさきに進み、ホーンさんが小舟から岸へ上がるのを見ますが、声はかけません。王都のはずれにある近衛騎兵旅団まで来たとき、潮の向きが変わったと船頭が言います。そして、私を指して彼らは小声で(異端者)と、呟き、黒人は(悪魔)とも囁きました。そこで喜んで彼らを追い払おうと、ゆっくりと陸に這い上ります。三六シリング以上の持ち合せを知られたくないが、今後の推移を考えて黒人に船頭付添いで両替に行かせ、私は水辺の地上に横臥しました。まもなくガリシア人の人夫が近寄り、望むところへ十八シリングまたはそれと同等の金片で運ぶと誘います。しかし、宵闇が迫り、この男をさして信用できません。待ちくたびれた頃、担ぎ手が戻ったので、船頭は私に尋ねました。「金子を持ち逃げされると思わなかったか。危ういことだ。」奇妙な口調で彼は語り、私は答えません。さきに進もうとせず、黒人は言います。「最初に約束したとおりに、船頭が待ってくれなければ、親方のもとへ夜戻れません。」「急いで帰れば」と船頭は応じました。「おそろく約束を守ったことになる。」こうして黒人は私を交互に担いで歩き始め、休息のためときどき下に降しました。彼らはかなり弱々しく、一歩踏む毎に転倒を心配したほどです。一マイルあまりの距離ですが、私たちにとって本当に長い道のりでした。多大の難苦を経てヘイクさんの別荘まで運ばせるのに成功したのです。銷沈した面持で、口を緘して歩く人々が、道に溢れていました。彼らが休息している場所のひとつ、貴族の邸宅へ登る石段に黒人たちは私を降し、来客かと思つた婦人たちが窓辺に来ました。付近にある大きな未亡人養老院の別棟に彼

女らはいて、その本館はすでに倒壊したと言います。背負われて身体が長時間揺れ動き、私の激痛が耐えきれぬまでするとき、担ぎ手がヘイクさんの庭園の正門へ私を届けました。開け放れているので、門をくぐると、邸宅へ到る小道に沢山の人がいます。しかし、宵闇が迫り、顔の見分けがつきません。しかし、ヘイクさんの屋敷かどうか、いまは在宅かどうか、すぐさま私は尋ねました。彼らのだれも知りません。すこし前へ進んだ私は、ひとりの男が英語を話すのを耳にし、同じように尋ねました。妻と愛し子三人を喪った、とだけ彼は答えます。邸宅は倒れないものの、彼らはなにも知らず、私を構ってくれません。ヘイクさんの家族はこの地を離れたか、おそらくは乗船したと私は結論し、為すすべも見当らず、完全に絶望しました。そのとき近くにいたヘイクさんが私の声に愕然としました。前日世話するよう依頼されたものの、もはや死んだか、死につつあると思ったからです。大慌てで父と弟を呼びながら、すぐに私のもと来ました。私の容態を絶望的と考えた彼は、救出されるのを心から願っていたのです。ヘイクご一家から私は心優しい情愛で歓迎され、そうした配慮を受ける喜びで全身が満たされました。だから終焉の日をここでの介護によってさきに延せることを、真心籠めて神に感謝する、とまずヘイクさんに話しました。絨毯を利用した仮設小屋が葡萄園にあり、そこに私を運んでベッドを用意し、やや強い白ワインとバターつきパンを供されました。そのときの私にはとくに甘美で爽やかに感じられ、恵まれすぎると懸念されるほどでした。二人の黒人少年を欣然として放免し、各々は十八シリングに喜びました。ヘイクさんは王室の獣医を呼んでくれました。彼は接骨師としても有名な人で、家族とともにこの庭園にいたるのです。理髪外科医の協力も得て、彼はすぐさま私を診察し、腕のほかほこも折れていないと断言しました。ほかの部分はすべて創傷か打撲であり、熱が下がれば恢復すると言うのです。彼らは腕の手当をしたものの、肩の脱臼を見落します。その時点では左脇腹をもっとも痛く感じました。しかし、外観から察せられる病状よりも、獣医らの診断は遙かに好ましいものでした。得難い診察に見落しがあっても、つぎの機会に補正できる、と私は我慢強く考えたのです。とはいえ、真夜中ご家族が横たわって寝ているときに、左脇腹の痛みがとくに激しく、呼吸が止るばかりです。（私たちが田舎に滞在した一カ月、彼らは一度も着替えをしません。）真夜中には痺れるような冷気が骨折した腕に浸み、あと数秒で息絶えると感じました。それでもご家族の僅かな安眠を妨げないよう、訴えるのを抑制していると、ヘイクさんが私の容態に気づいて、介護のためアブラハム・ヘイクさんを起し、彼の手当で多少

楽になります。翌朝の放血によってさらに恢復し、この療法をさらに四度余儀なく受けました。火曜日には万難を排して商館の外科医スクラフトンさんがベレムから私のもとへ来られました。雑踏で立往生したと言いながら、外科医は私の病状に対する獣医の診断を是とされ、彼は接骨師としての力能も高いので、良き医者に委ねられたと、嬉しげに話されます。ヘイクさんも能うかぎり援助と介護に努めると確約しました。しかし、飢えた人々がパンを求め、こちらへ押し入ろうとする叫喚を聞き始め、私たちに供される食糧も盗難の怖れに曝されます。到るところで発生した強盗や殺人がさまざまに伝えられました。一切の統治が停止したかに思われ、イギリス人はみな己れの安全のためにただちに船に乗れるようヘイクさんに求めるのです。必然的な経緯で彼が乗船を許すことを、毎日私は期待しました。そうでなければ、ほかの希望をどこで見出せるか判りません。そして、船舶の持主であるジョン・アレン船長からテュージョ河で乗船するよう熱心に懇請されたとき、どれほど深い感恩が私の胸に溢れたことでしょう。時間を隔ててもけっして抹消されない感恩です。船にはご自身の席がひとつありましたが、家族を残すことはできない、船長は申しました。なんとしても〈息子たち〉の席を設けるのだと言いながら、悲惨な病状で見棄てるわけにいかぬ〈私〉をも息子のひとりとしたのです。これ以上感謝の言葉を重ねる必要もないでしょう。船長はこの約束をあらゆる側面で完璧に履行され、十一月二九日土曜日私を運んで、さきに述べた船舶に乗せました。その翌日地震後第二の船として乗客二四名でイギリスへ出港しました。ウィリアム・クリエス船長による試行的なパケット・ボートはその十日前にリスボンを出発し、乗客は十七名でした。国全体の混乱と艱苦のなかでヘイクご一家にかくも難儀を及したことに、恐縮する気持が募るばかりです。また、わが身の恢復はひとえにアブラハム・ヘイクの格別な介護と配慮に負うことをけっして忘れません。①

チエイスを乗せた大型船ではテージョ河をすこし遡っただけ、多くの乗客が河岸に降りた。その地点は現在の終着駅サンタ・アポロニアの付近と思われる、そこからマルヴィラなど近郊の田園へ向かう街道があった。近くには国王フェルデナンドによって市壁とクルズ門が構え、のちにサンタ・アポロニア要塞も築造されて、リスボン市内への重要な関門とされていた。

リスボン近郊の田園マドル・デ・デオスは、かなり広い範囲に及ぶが、高名なマドル・デ・デオス尼僧院をチェイスは指示した。尼僧院の近隣にフランシスコ会のサブレガス聖母修道院もあり、ともにサブレガス河港から至近の距離に位置する。「リスボンの需要に応えて、」とこれら交通の要所についてはカステルホ著『リスボンのリベイラ地区』が明快である。「近郊から陸路で運ばれる商品は、市壁に圍繞された城下へとくに六つの市門から入れるのを許された。すなわち、クルーズ門、サン・ヴィセンテ門、サント・アンタオ門、サンタ・カテリーナ門、そしてカタクファラス門である。また、サブレガスやマードル・デアスの河岸からポルトガルの王都に入る旅行者は、クルズ・ダ・ペドラ坂やサンタ・アポロニア右道を進んでサンタ・クララかパライゾへ達し、フェルナンド国王の市壁に設けられたクルズ門を通過する必要がある。」<sup>①</sup>しかし、クルズ門からは都心の王宮広場よりもマドル・デ・デオスのほうが遠く、イギリス人在留民の多くが避難した田園マルヴィラはさらに内陸部へニキロほど入る。

首尾よくチェイスが上陸したサブレガス河港の付近でも修道院と尼僧院が著しく破壊された。「マドル・デ・デオスは」と『地誌リスボンの今昔』で語られている。「フランシスコ会素足修道女の尼僧院であって、一五〇九年六月二三日レオノール王妃によって創立され、さらに建物と教会が国王ジュアン三世陛下により改修された。」<sup>②</sup>ここには貴重な遺物や有名な聖母像が蔵される。「地震によって甚大な被害を受けたが、直後に発生する火災を奇蹟的に免れた。聖歌席でひとり頭部に重傷を負ったが、修道女たちが全力で助け、まもなく恢復した。第一礼拝堂の障壁、聖歌席から祭壇へ進む通路の障壁、鐘楼内部の事務室も崩れたものの、慈愛深き国王ジョゼフ一世陛下の御意によりすべて修復された。」<sup>②</sup>

ヘイズの別荘まで担がれる途中、チェイスが出会った婦人たちは、所属する養老院の倒壊によって貴族の邸宅に避難していた。教区教会の被災報告を点検した研究者ソーサは、養老院の被災についてつぎのように記録する。「アンジョス養老院は貴族未亡人のため一七四七年ラザロ・レイタオによって創設され、今日ではイタリア・バルバディンホス会の病院として著名である。『教区記録』によれば、この施設も地震により大きな被害を受けた。」なお、この田園には王侯貴族の邸宅や別荘が多く、ソーサはラブラディオ侯爵邸など七つの殿閣について被災

① Castilho, *op. cit.*, p.94.

② Castro, *op.cit.*, tomo terceiro, parte V, pp.273-274.

状況を記載している。①

チェイスが奇蹟的な脱出に成功した要因は、不屈の意志と明敏な判断力に存するが、数々の優れた人物に介護されたことも注目すべきであろう。ヘイクの別荘へ往診に来たりチャード・スクラフトンは、英国商館専属の医官である。商館には牧師とおなじく不可欠の存在とされるが、地震発生の瞬間はバイシャ南部の邸宅で診療の最中であった。控室で待機するドラムランリッグ伯爵は、建物の倒壊に愕然とし、従者とともに脱出する。医官自身も生死不明と伝えられたが、実際には近郊ベルンへ避難し、そこで被災者の治療に専念したのである。②

ペドラス・ネギラス街の邸宅で保護し、王宮広場へ誘導した貿易商フォルグについてチェイスの感謝と信頼は揺がなかった。河港近くにひとり遺されたときも、置き去りの疑惑を抱いたのはむしろ周囲の人たちである。一七七九年に出版されたドイツの雑誌『ハノーヴァー・マガジン』には、貿易商多数の書簡集が特集に組まれ、チェイスを救護した博愛的なハンブルグ人についての証言が含まれる。

③なお、大地震に係わる古文書にはポルトガル在住のハンブルグ人について三名の無事、二名の負傷、リュベック市長の孫ソール・ラーデンの行方不明が誌される。リスボン駐在ハンブルグ領事ストケラーは王都近郊の別荘から脱出した。さらにラメイヤー姉妹も難を免れ、そのひとりの訳業、ポルトガル語『聖書』がハンブルグ上院図書館に蔵されると言う④

マドル・デ・デオスの別荘でヘイズを手厚く保護した家長ヘイグは、この地震で息子クリストファーの嫁、エリザベスを喪った。「ヘイク氏の邸宅は」とあるイギリス人は伝える。最初の地震で倒壊し、哀れにもヘイク夫人がその下敷きになりました。ほかの方々はみな脱出し、火の手がまわる前に、現金を収めた金庫を掘り上げたそうです。それ以上のことは聴いていません。」⑤ 英国商館の幹部としてヘイク一家へは在留民の信頼も厚く、震災後クリストファーは大手ワイ

① Sousa, *op.cit.*, volume III, pp. 708-711.

② Paice, *op.cit.*, pp.107, 125-126.

③ Poirier, *op.cit.*, p.37.

④ Hamburrgo e o terremoto de Lisboa do 1 de Novembro de 1755. in Sousa, *op.cit.*, volume III, p. 554-555.

⑤ Anonym , Another Letter dated November 19 from Lisbon , in *Gentleman's Magazine*, 1755 november . p.559.

ン業者ホルズワース・オリヴァー・ニューマンの代理人をリスボンで勤めた。①  
多くの在留外国人もリスボン郊外へ避難し、たとえばイギリスの領事エドワード・ヘイは近郊マラヴィラの別荘に被災者を受け入れる。サン・ジョルジェ城砦にしばらく留まった牧師リチャード・ゴダールもその地へ移動したが、領事に負担をかけぬようほかの邸宅に滞在した。アルファマ丘陵から彼らはクルズ門を経てマラヴィラまで、瓦礫に覆われた陸路を歩いたのである。だれもが望郷の念を募らせ、早急な帰国を望んだが、船舶の破損と航路の不安のため遠洋航海が震災後は中止されていた。②

七 一七八八年十一月二十日 ロンドン近郊ケント

故郷への帰還 震災の総括 チェイスの終焉と墓碑

本来パケット・ボート（定期船）は郵便物を運ぶ船として十七世紀から運航され、イギリス国王はヨーロッパ大陸やアイルランドへ行く十五艘の船を占有し、他の船では乗客や貨物も運ばれた。北米やアジアとの貿易でもこうした船舶によるいわゆるパケット・トレードが行われる。イングランド南端の港フォルマウスとポルトガルと各地を繋ぐパケット・ボートにおいて、もつとも重視されたのは、貿易で得た金貨や貴金属の運搬である。フィッシュアー著『ポルトガル通商』にはつぎのように記述されている。「イギリス行き金塊を積荷するのに、リスボンは絶好の基地であった。これを堅持されたのは、イギリスの商品がポルトガルの市場において卓越した地位を占めるからであり、またイギリスへの金塊輸送に最適の船舶、すなわちイギリスの軍人の護られたフォルマウス・リスボン間パケット・ボートに、ポルトガルのほかの港より大きな特権が与えられるからである。」たとえば、一七四一年の一月から六月までに九艘のパケット・ボートがリスボンを出発し、受託者六一人に到着した。なかでも一月二日リスボンより二艘が出航し、ひとつは受託者六一人による二万八八四ポンドの財貨を積んで一月一八日に、また他は受託者三三人による一万八九四一ポンド財貨を積んで一月三十日に、いずれも受託者へ到着したと記録される。海賊の襲来に備えて、パケッ

① Fisher, *op.cit.*, pp.100-101.

② Paice, *op.cit.*, pp.108-125.

ト・ボートには嚴重な警備が敷かれ、武装した軍人が同乗した。①  
リスボンを出発するパケット・ボートは、最速であれば八十時間でフォルマウスへ着くが、普通には八日か九日を要した。速度を重視した小型の帆船であり、療養や観光を目的とする旅人には快適な船内ではなかった。ポルトガル沖合の濃霧がしばしば運航を妨げ、ビスケー湾の嵐のため多くの船客が船酔いに苦んだとされる。大地震のあと運航を中止していたパケット・ボートは、十一月十九日バールミンガムの貿易商、ベンジャミン・ファーマら十七名を乗せて試行的に出航した。②その十日後第一次の帰国船で二三名の船客とともにチェイスがイギリスに向かったことは、さきに引用した彼の書簡のとおりである。

「貿易商チェイスのリスボン地震書簡 その七」

みずからに生じたすべての出来事だけでなく、それに伴うさまざまな希望や恐怖、おそらくは身体の衰弱によつてときに低下し、ときに拡張する心情をも、以上できるだけ精細に叙述しようと思ひました。したがって、ひとつだけ付言したいのは、地震のあと私が街路へ抜け出ると、だれの面持も幽霊のように悲嘆で曇り、身内の間ですら助け合う氣力を失っていたことです。〈私〉などだれも顧みない、と咄嗟に考えました。至高なる万物の統率者に身を委ねようと、無言のまま秘かに決意したのです。自己の罪過を償うため、神が科される事柄を、耐え忍ぼうと謙虚に望みました。そうしたときに障害ある者の烈しく喧しい嘆願は、人々の戦慄を實際に増す効果しかありません。みずから求めないだけでなく、期待もしなかつた救助が、ほとんど知らない方々から差し伸べられたことを、神の摂理として深く感謝せねばなりません。なかでもフォルグさんは僅かな面識しかないのに、もっとも窮地に置かれたとき守護神のように現れ、救ってくれました。あのような仕方では余儀なく私を残したことを、なによりも憂苦したと後日話されました。河岸に小舟が着くや、待ち構えた人でただちに満ち溢れるので、乗船を確約する一切の望みが消えたと思ひ、みずからはそこから立ち去るが、私への救助をすぐに手配しようと思ひました。それゆえ、河を渡るのにながい時間を要したあと、フォルグさんはおなじく河を渡ったイギリス人、靴製造業者のブライドさん

① Fisher, *op.cit.*, pp.92-95.

② Paice, *op.cit.*, pp.1, 144, 155.

に会い、私を探しに行き、一緒に連れてくるよう懇請したのです。ブライドさんは手を尽して尋ね歩き、見つからないので、すでにそこから運ばれたと妥当な結論を下しました。このような経緯を私がとりわけ詳細に述べるのは、彼らの救援活動に然るべく脚光を照明をあてるためで、深厚な感謝の念とともに極度の驚愕と感嘆をもって、かならずそれを回想するです。

偶々私が居合せたウラーダを除いて、わが家で倒壊した部分はなく、家族のなかに死者はありません。ただ家政婦と従僕ひとり戸外へ逃れるときに重傷を受けます。しかし、最上階の天井は破損が甚しく、どの部屋へ入るのも家族は怖れました。

すべての災禍は三度にわたる当初の地震から派生し、その揺れが海潮のようの一種の回転を伴ったこと、家々が驚くほどながく耐えたことは遍く確認されています。被災した国民にとってこれほど不運な時刻と地域はありません。王都では狭い街路が網の目をなし、堅固に造られた高層建築が倒壊して、通路を埋めたのです。その日は大いなる祭日、〈万聖節〉であって、すべての教会の祭壇を沢山の蠟燭が照していました。それらに人々が満ち溢れた瞬間、大半が即座に壊滅！ 教会から逃れる人と、そこへ避難する人で街路も錯綜し、建物の倒壊だけで彼らの多くが死んだと思われまます。

すべての地域で遍く脅威と艱苦が襲いかかり、それらを正しく叙述するのは至難な業です。多くの人々が水上に避難して救われ、ほかの人々はそこへ逃れて死に至りました。屋上に登ったり、地下へ潜って、奇蹟的に生き延びた者もあります。負傷しない者でも、なかには住居の倒壊の下敷となり、そのまま焼死したのです。また、自宅の瓦礫に迫り来る火災が、従来気づかなかった小道を照し出し、そこからオランダ人数名が脱出したと聞きます。要するにあらゆる様相の死が瞬く間に繰り上げられました。これを審判の日と信じる人々の激烈で喧噪な祈りが、動けぬ者の悲痛で無益な嘆願とあいまって、全般的な錯乱を止めどなく増大させます。世にも不思議なことに河が引続き数度上昇と下降を繰返して、一時は王都の低地を沈没の危険に晒すし、その後も船舶を岸辺に押しやり、いまだ見たことのない岩石を露呈させたと言われます。クリエス船長は遭難を警戒して、長距離の運航を一度は諦めたそうです。

さまざまに報告されていますが、水辺の近くにいた人たちが轟音を聞き、なんの前触れもなしに最初の震動がすくなくとも三分半続きました。鎮ったと思ったとき、壁を越えて私は住居の狭間をなす〈四階〉に倒れます。そこではしばし伏しただけで、〈第二の〉震動には隣のポルトガル人の住いで襲

われました。多くの人々が第一の震動と混同しており、これは十時に発生したと言われます。したがって、フォルグさんの邸宅で感じた（第三の）震動ともおそらく違うと考えます。十二時の震動だとすれば、通路にながく伏したことになるますが、（二時間）もいたのではなく、第二と第三の震動の間、十五分ほどであったと思います。土曜日の夜十一時頃まで留まったフォルグ邸宅は、私の家と同じ通り、ペドラ・ネグラ街にあり、城砦へ導く登る坂道に位置します。そこから眺望できる王都の中心部は、王宮へと拡がり、対面の丘陵バイロ・アルトへ傾斜し、多数の教区を含みますが、総じて大きな炎で燃えているのです。三度わが身に必然的な死を覚悟しました。（第一）は全市が海のうねりの如く震動したときです。（第二）は四面壁のなかに閉じ籠められたとき。そして、（第三）は大火を目の前にしながら、フォルグ邸で置き去りにされたと感じたときです。土曜の一夜と日曜を過ぎた王宮広場でも絶え間のないほど大地が揺れ、ここに隣接する巨大なペドロ埠頭は早くも十二時頃第三の震動で沈下しました。この埠頭では三百人もの群衆が殺到して、必死に小舟へ向うところを、船もろともみな波に呑み込まれ、以後あえて岸に寄る小舟は皆無に近いと言います。これらすべてを聞いて私が怖れたのは、波濤によって広場が水没すること、震動の度毎に自分たちが沈んでいくこと、さらにすこしでも波が高くなれば、地盤の低さから氾濫に至ることでした。さきに述べた艱苦に加えて、新たに水の脅威に晒された私は様々な責苦に苛まれ、いかに残酷な異端審問でもこれらの半分でも発案できるかと、一度ならず思いました。人々の錯乱が過度でなければ、多くの人命だけでなく、財産も護られたでしょう。なぜなら、日曜の朝までは水辺の税関へは火が達せず、その両側に広い空地がありました。だから私たちの艱苦を誘発した材木の塊が、容易かつ安全に小舟へ移せたはずです。他方外国人脱走兵を多く含む近衛兵士は民衆の救助とは裏腹に、略奪者と化しました。さらに言えば、倒壊した家屋からのみ発生した恐るべき数の火災は、自分らが放火したと、処刑の際自白したのです。なぜなら、すでに書いた埠頭での一件を除けば、炎は地中から湧き出ず、大地には火元がないからです。しかし、到る所に地割れが生じ、そこから水や土砂が噴出しました。

国王は常備軍に向けて最寄の駐屯部隊をただちに派遣しました。彼らの到着によって秩序が回復され、通行証なしの遠出を禁じられた民衆に食糧を供するため、肉屋とパン屋が配されました。悪臭が募り、悪影響が懸念されるので、剣を抜いた兵士たちがただちに死体を埋めるよう市井の人たちに命じます。殺人や窃盗の罪を暴かれた者を即座に処刑するため、都内の各所に裁

判官も配置されました。広場を去る前に聞いたところでは、王都に点在する絞首台には首を括られた遺体が八十もあるのです。船舶の若干は精査されたものの、許可なく港を離れることはできません。王都の中心部、もっとも豪華な地域は焼失しました。しかし、広大な近郊は焼け残り、その後修復されます。大聖堂は倒壊しただけでなく、同時に焼失し、のちに全面水浸しとなったのです。北方百五十マイルに位置するポルトでも、さらにリスボンから三百マイル離れたマドリッドですら、異常が感じられました。マフラの王宮と修道院は倒壊せず、壮大な水道橋が被害を免れました。

国王ご一家はリスボンから三マイルさき、通常住われるベレムにおられました。階段を降りたとき、王妃の首を大きな石がかすめたけれども、ご一家に負傷者はいないとのことでした。

ポルトガル人は劈頭からふたつの極端に分れます。ある人たちは王都の住民の数を実際より多く算定し、反対にほかの人たちは喪った住民の数をすくなく見積りました。前者は三五万人以下ではありえないと主張し、みなみにヘイクさんは多年当地に居住する経験からもほぼ二五万人と考えます。後者はおそらく政治的な思惑で隠そうとするかのようなのです。したがって、被害の実数が確認されるとは思えません。公にされた最良の報告のひとつではほぼ一万五千人と算えられました。J・プリストウさんが話されるには、最高の権威筋（国務大臣だと私は思います）、によれば発見され、埋葬された死者の数は二万二千数百人に達します。これに即して考えれば、それ以上の人数がなお瓦礫の下にあるので、地震による死者を五万人と算定するのが妥当でしょう。

最近渡された名簿によれば、このたび死亡したイギリス臣民は六九名で、その大半をアイルランドのローマ・カトリック教徒が占め、イギリス人は居留者三百のうち十二名か十三名にすぎません。シャルル・ハーディ卿の妹、ヘイク夫人は街路へ脱出したあと、自宅の正面の倒壊で死にました。彼女の遺体は三ヵ月後瓦礫に生前と変らぬ姿で発見されたのです！ジル・ヴァンサンさん、ジョン・レゲ（子）夫妻と幼い娘、テオバルド嬢、および他の四名はジョン・レゲ（父）さんの邸宅で歿しました。

シエルマン夫人は狭い通路で女中とともに逃れるには太り過ぎ、焼死したと思われまます。ペロソン夫人、チャーチルさん、ハッチンソンさん、等々も亡くなりました。ホルフォードさんは両脚を骨折し、教会へ運ばれて、そのあと焼け死にました。ブランフィスさんの家政婦（フセイ夫人）は、かつて数年私の父のもとにいたのですが、荒墟から救出されたものの、まもなく息

絶えるました。罹災の総体を考えれば、以上は多からぬ数値であり、神の配慮と感謝します。なおまた、居留者の大半が街路から離れた場所にいたこと、街路では彼らが来る以前にほぼ倒壊が終ったことを、私は主要な原因に挙げたいと思います。

ふたたび友人に会えた私たちの限りない歓喜は、想像も表現も及ばないほどです。死者が甦ったように互いに見詰めます。だれもが奇蹟的な脱出を語って、生命を保てたことに満ち足り、充ち足り、ほかにはなにも欲しないのです。けれども、しばらくすると生きる希望が生活の不安を呼び起します。憂鬱な想いに沈んで彼らは、財産とともにいっそ命まであの激震で失ったほうが、と悔むのです。

ポルトガル人に関しては、一種の宗教的狂気に完全に憑かれ、頭や腕の欠けた聖者像を曳き歩きました。どう災厄に見舞われたかを互いにきわめて敬虔な口調で話し、汝らの邪悪に審判が下されたたと聖職者はみな語ります。異端者に甘すぎるためだとすら言う輩もあり、荒々しく裁判所へ押しかけ、これこそ民草の苦難の原因と断言しました。身を護る意図すら流神に近いと彼らはみなします。〈天に対する挑戦〉と大勢で叫ぶのです！造幣局を警護するある士官は、絶大な勇氣と決意をもって三日間そこに留まり、隣接する建物を打壊して美事炎上を防ぎました。その功績を高く評価して、国王が彼を表彰されました。

とうとうひとつの奇蹟、裁判所の秘かな指令で実施されたと思われる奇蹟が、民衆をある程度落着かせました。というのは、有名な修道会に属する教会、地震で倒壊した教会の荒墟から深夜火焰が立ち昇り、真中に座った聖母マリアが遙かに聳える丘陵の頂上に置かれた聖女ペンハダ・フランカに呼びかけ、民衆に白い手巾を振ったのです。これこそ過去の罪過に対する赦免であり、生命への約束であるとただちに宣言されました。

にも拘らずその後も破壊の預言が数多く幾度もなされました。むしろここで留意すべきは地震の二カ月前ロシオ広場で挙行された牛祭りの際古い預言が話題にされ、一年以内にリスボンでふたつの火災を伴う大きな災厄が発生すると囁かれたことです。なぜなら、数百年前同じ祭りがそこでなされたとき、観覧席が崩れ、多数の人々が死にました。予言が的中し、そうした事件が起りはしないか、という不安から多くの人々は一日の盛儀に行くのを避けたのです。

スペイン王妃はただちに兄上のもとへただちに多額の現金を送付されました。また、国王も自筆で書簡を綴られ、財宝や軍隊を提供するだけでなく、

必要ならばみずから現地に向くと申されました。

フランス人も些末なものを若干差し出しました。しかし、ポルトガル人は劈頭から一切の宗派を超えてイギリスに希望を託します。ここからあらゆる形態での救援を得られると、堅く信じて期待したのです。イギリスの創意工夫が底知れぬ惨禍を軽減することができるよう風向きに恵まれば、彼らが欺かれることはなかったでしょう。①

不屈の意志によって運命を切り拓いたチェイスは、パケット・ボートによってイングランド南岸のファルマウスへ到着し、さらにそこから故郷ケントに向かったと思われる。ケントはロンドンから東南の近郊に位置し、ドーヴァー海峡に浴う白い崖が有名である。果樹園などの農業経営のほか、服地の製造が盛んであり、イギリス英国国教会の総本山、カンタベリー大聖堂もこの地域に位置する。

十一月二九日帰国の途に就いたチェイスが、十二月三一日付書簡をどこで書き、どこから発送したであろうか。被災者は身の安否を早急に肉親へ知らせるはずであるが、そうした文言がそこには見いだせない。おそらく母親への第一便はマドル・デ・デオスへ着いた直後に書かれ、そこには母子としての言葉も含まれたであろう。十二月三一日付書簡も母親宛の体裁をなしているが、壮絶な体験を後世に伝えることを主眼とし、幾度も推敲や加筆や改編がなされたかもしれない。

一七九四年に出版された雑誌『ロンドン近郊案内―王都から十二マイル以内の町村と村落に関する歴史的解説と伝記的挿話』には、ケントの教区教会プロムレイの細目として、チェイスの墓碑銘が記載されている。この教会は聖ペテロと聖パウロを頌して一六世紀に建立され、広場には塔と穹窿が聳える。内陣、身廊、側廊の築造に燧石と石材が用いられ、壁面には塔と穹窿が聳える。内陣、身廊、チェイスの石碑が見出される。②

### 墓 碑

当教会教区に所属したトーマス・チェイス殿

① *Gentleman's Magazine*. op.cit., pp.315-317.

② *The Environs of London : being an historical account of the Town, Villages, and Hamlet, within Twelve Miles of tat Capital : intersed with Biographical Anecdotes*. volume IV, 1794. pp.313-314.

一七二九年十一月一日リスボンで誕生。  
一七五五年十一月一日凄絶にして忘れぬリスボン大地震のため  
生家で瓦礫に埋まりながら、奇蹟的な脱出によって徐々に重症  
ら恢復し、一七八八年十一月二十日まで存命した。①

在留民のなかでも貿易商ファーマーや牧師リチャード・ゴダールはパケットに乗船し、療養中のドラムランリッグ伯爵は慎重を期してイギリスの軍艦を手配されたが、いずれもほどなく世を去った。若壮の身でありながら、震災での艱苦と多難な長旅によって憔悴したためであろう。しかし、強靱なチェイスは帰国後さらに三十年以上生き抜き、天寿を全うしたことがこの墓碑から判る。

一八一二年七月に月刊誌『ジェントルマンズ・マガジン』の主幹シルヴァノス・アーバンは、匿名の読者からつぎのような書簡を受け取った。「際立って凄惨な出来事の証言をあなたにお送りします。数年前に私が手稿から転写したもので、人々の関心を惹く文書と信じます。いまだ刊行されていないので、貴誌に数度分割して掲載されれば、あなたにも読者に裨益するところ大と考えます。」②この書簡にはブロムレイ教区教会に祀られるチェイスの墓碑銘も転記されていた。リスボン大地震の直後、全権大使アブラハム・カストレスの報告をはじめ、数多くの証言を提供した『ジェントルマンズ・マガジン』に、一八一三年の二月号から四月号まで三次にわたりチェイスの書簡が掲載される。貿易商の終焉から二五年、ポルトガルの大地震から五八年が経過していた。

チェイスが逝去した翌年、フランス革命が勃発し、やがてナポレオンによるヨーロッパ制覇が始まった。リスボン復興を達成したポルトガル王権もフランス軍のイベリア半島侵攻に戦慄し、遙か植民地ブラジルへ遷都する。その後ロシア民族の反撃によってナポレオンはモスクワから敗走したが、一八一三年ポルトガルの王都と女王マリア一世はなおリオ・デ・ジャネイロにあった。

初出 二〇一三年六月一日

① *ibid.*, *op.cit.*, pp.105-106.

② *Gentleman's Magazine. op.cit.*, p.105.